

小兒のいさかひ

中村 五六

どんなに温順いと云はる、方でも、縦ひ他人といさかひを爲ないまでも、姉妹同士などでは必ず爲るもので、このいさかひといふ事を少し硬く云へば喧嘩、口論、鬭争などいふ事になるので、鬭争といへば先づ掴み合ひといふ事ですが、この掴み合ひはしないまでも、口論喧嘩位は何誰もなさつたに相違ない、私なども其は覺えがある、どんな仕たことは無いと云つても、大人に成るまで否、中年になるまで、否、多少物心の附くまでに必ず一度や二度は爲られたに違ひない、何も其を仕たからとて取て耻るには及ば無い、この喧嘩口論を爲るといふ事は男女に限らず、文野に拘はらず

小兒の通有性である、現今兒童の教育といふ點から、左様云ふ事を可成矯めなければ不可ぬといふ説や、或は絶

對に爲せないやうにするが宜いと説くものもあるのであるが、小兒が喧嘩や口論をするのは、

小兒の本能の一つである

と私は考へる、この本能といふ事に就ては、自己を保存せんが爲にする所の本能とか、又は營養を主とする所の營養本能とか、種々なる本能がある小兒が喧嘩や口論をするのは、或は防禦の爲にするものもあらうし、或は保全の爲にするものもあらうが、畢竟このいさかひといふ事をするには毎時も怒りの情が伴うて起る、例へば、自分の思ふまゝの事を爲せないとか、又は希望を妨げられた、ア、残念だ口惜しいと云ふやうな事から起つて來るものである。

それが如何なる風に現はれて來るか云へば、多くの小兒は泣くとか、又は首をイヤノなど、云つて左右に振るとか云ふのが普通で、それが少し激しくなると突除るとか、或は推倒すとか云ふ事をするが、甚だしきはチダンダを踏むとか、その他随分荒ッぱい仕打で現はして來る、それに直ぐ顔面に其色を現はすものであるが、併し夫等の

性質は、之を大人に比すれば屢次激しいものであるけれども、その現はれ方の激しい割には、その行為が極めて單純であると同時に時間も至つて短かい、之に反して、大人となるとなかく、時間が長い、二日も三日も乃至一週間も一たび腹を立つと口を利かないなど、云ふ人が、兎もすれば有るのである、それは兎も角として、小兒がいさかひを爲るのは何等の益があるかと云ふに、過度に渡らない限りは固より本能と認むべきものであるから、必ず多少の利益があるのである、故に普通世間の人の言ふやうに、このいさかひと云ふ事に就ては小言を云つたり、又は八ヶ間敷く云つて貰ひたくないものである。

何故といふに、この社會といふものは何れの方面でも競争の烈しいもので、この激しい競争の状態を現はすのに、小兒のいさかひといふものは荒ツぱい形式に於て現はすものである、例へば、國と國といさかひをするには、砲彈や戎器や、その他軍艦とか水雷とかいふやうな種々なる武器を以てするのであるが、それが小兒のものは棒干切

などでするのである、假設棒干切を持たないで口喧嘩を爲るのは、恰度甲乙の國と國とで所謂外交談判を爲るやうなものであるから、小兒がいさかひを爲るのは本能とは云ひながら、前にも云ふが如く、過度に渡つてはならぬ、何事も過ぎたのも不可ないが、左様かと云つて及ばないのも宜しくふやうに定めて居ればお腹の加減も宜いのであるが、それを若しも甘味といつて一杯食べ過ぎるとサア後でお腹が大儀で仕方が無い、所が、三度々々三杯づゝ食べるものを、何かの都合で一杯か一杯半ぐらゐしか食べないと云ふと、少し時間が過ぎると空腹で仕方が無い、之は及ばぬのである、右の喩の如く、食べすぎて、又食べ足らないでも、何れも宜くないのである、併しまた食べ足りない方が始末が仕好い、素より小兒のいさかひといふ事は餘り好ましくは無い、併しチョツといさかひをしたからと云つて、無闇に叱りつける杯は是また褒めた咄といふ事は出来ない、と云つて之を奨励せよと云ふのでは無い。

一口に小兒のいさかひと云ふけれども、之に對して慎重なる注意を拂うときは、随分その場合や程度に依りては價值があるのである、この本能があれはこそ、個人と個人は競争して商賈に勵み職業に勤め學生としては學問を研き智識を磨くのである、それ故に一家この心あれば繁榮し、一郷この心あれば富み、一國この心あれば富み且つ榮えるのである、就中一國となつては特に斯心の必要を感ずるのである、もし一國にして此心が無かつたならば、逆も他の侵害を防禦する所では無い自己を保全することすら出来るものでは無い、乃ち小兒のいさかひは、これらの形式の粗ッぼいのであるから、親達や又は長上の者などが無闇に之を矯正するのは宜しく無い。

で、その取扱法は如何したものと云ふに、成るべく小兒が怒る機会を避けるやうにすると同時に、父母等も怒つて小兒に接してはならぬ、よく世間では小兒が怒つて泣きでも爲ると、その泣き止むまで放つて置く人があるが、これは甚だ宜しくない、又或者は左様いふ時に、小兒を獨りぼつ

ちにして置いて、さうして自分は他の部屋などへ避けて居る親達などもあるが、是等は何れも其當を得たるの處置とは云へぬ、それよりも凡て斯ういふ時には、小兒自身をして自然の結果を経験せしめて、そして自省を促がすといふやうな處置を取らなければ不可ない。

併し大体から云へば、決して之を獎勵するの必要は無い、随分明治以前の武士教育としては、坐ろに親達が其子に對つて之を獎勵するの傾があつたのであるが、今日では其必要を認めない、今でも小兒がいさかひでも仕て飯つて來ると、動もすれば之に体罰などを科する向が尠なからぬが、其様なことを爲るよりも、常に其交はる所の友に優れたる者を選ばしむるがよい、男女に關はらず、生涯競争といふ事の範圍を脱する事は出来ないであつて、如何しても之を繼續して行かならぬのであるが、その競争といふ事を爲るに附けても性質の良いものにして欲しい、現今學校や家庭などでも種々の競争が行はれて居るので、随分結構は結構だが、どうもそれに伴ふ弊害があるのであ

る、それゆゑに夫等の競争を今少し品好くしたく
謂ゆる君子の争といふまで無く、ともそれに近
いものにした、それに此競争も一個々々で無く
之を擴めて一群または一團となつた大いなるもの
にして利用したのである。

▲脳髓と人の賢愚

(醫學士 渡邊房吉氏)

脳髓の輕重大小は動物の賢愚利鈍を判別する一の根據
となり、諸動物に一般に其頭腦が人よりは輕小なる故に
知識が人に及ばないといふ事に歸着し、動物中にては腦
の發達せるものは發達せざる者より賢いといふ事になる
人間でも一定度迄は此原則が適用せらる。解剖學上から
腦量が平均成人男子千三百七十五瓦女子千二百四十五瓦
ある。但男女腦量の相違は先天的である。年齢に就ても
二十歳より三十四歳迄の間が最重く、五十の坂を越すと
漸次減少する。又文化の度が腦量に關係する。古今の名
士に就いて見るも腦の重いものは偉い様である。併し又
他の統計は之を打破るべき事實を示して居る。乃て賢愚
の別は腦重以外其表面の皮質大小に關係するといふので
ある。即腦廻轉の多少に依るのである。

父兄に對する希望

如 柳 子

(1) 小供は貴い可愛いものであります。
他人の子供でさへこれを見ると誠に可愛いもので
その天真爛漫の状態、言ふに言はれぬ貴いところ
があるのでござぬます。實に白金も黄金も到底に
子供に及ばない。そしてそれが自分の子供であつ
て見ればどれ程可愛かどれ程貴いか。どうも子供
が多くて困るといふのは間違で、内の中には千兩
箱が二つも四つもあるところがつてゐると思ふて宜しい
のであります。ほんとうに千兩作る人になるか万
兩作る人になるか知れたものではない。

(2) 教育せねばならぬ。
子供は可愛いものである貴いものであるといふて、
頭から丸めて賞めて居るだけでは決して千兩作る
人になつて呉れない。否善い人になつて呉れない
養つて教へざるは父の過教へて嚴ならざるは師の
過といふてある、可愛い子には旅といふこともあ